

## 特別研究休暇中の成果報告

——出版50周年目にBernard Crick, *In Defence of Politics* (1962) を再読する

添 谷 育 志

2012年度は特別研究休暇をいただき、英国を中心とした現代政治研究の現状について調査・研究に専念することができた。休暇中にご迷惑をおかけした皆様には深く感謝いたします。国外で長期に調査・研究に携われるのは今回が最後の機会だと思い、下記のような準備作業を行ったうえで四カ月ほど英国に滞在しながら標記の課題に取り組んだ。

### \*準備作業

- ①アンドリュー・ギャンプル「政治／政治学の諸限界」（ケンブリッジ大学教授就任講義）の翻訳（『法律科学研究所年報』27号、2011年に掲載）
- ②ポール・ケリー編『20世紀における英国政治理論』の「序文」と「第1章」の翻訳（『法律科学研究所年報』28号、2012年に掲載）

### \*海外滞在

4月18日から～8月3日までロンドンに滞在しながら、主としてロンドン・スクール・オブ・エコノミクススのケリー教授の論文を巡って、英国政治研究の現状や英国政治社会の変容について議論した。その間フランスに10日間ほど旅行して見聞を広めた。ロンドン滞在中に最も印象的だったのは、歴史家エリック・ホブズボームの又従姉妹であるアンジェラさんと知り合えたことである。彼女自身はロンドン大学で英語教育に携わっている。知人の紹介で自宅でお会いしたが、パネッサ・レッドグレーヴを思わせる顔立ちといい、茨木のり子の詩「椅子かからず」——もはや／できあいの思想には椅子かかりたくない／もはや／できあいの宗教には椅子かかりたくない／もはやできあいの学問には椅子かかりたくない／もはやいかなる権威にも椅子かかりたくない／ながく生きて／心底学んだのはそれぐらい／じぶんの耳目／じぶんの二本足のみで立っていて／なに不都合のことやある／椅子かかるとすれば／それは／椅子の背もたれだけ——を思わせる凛とした生き方といい、自分が年老いてからも「椅子の背もたれだけ」に椅子かかって本を相手にする生活をできればと思った次第である。

その後はイングランドのストーク・オン・トレント（かつて陶磁器で有名なところだったが、今では見る影もないほどにさびれていた）やこれまで行ったことないロンドンのテムズ川東岸を訪れたり、天皇・皇后が宿泊した「クラリッジ」でランチを食べたりしてロンドン滞在を楽しんだ

\* 帰国後

帰国後は一週間ほど時差ボケに苦しんだが、その後は以下の翻訳に取り組んだ。

- ① マイケル・オークショット『歴史について、およびその他のエッセイ』（中金聡氏との共訳、風行社、2013年1月、『東京人』と『図書新聞』に書評あり）
- ② ティモシー・ガートン・アッシュ『ダンシング・ウィズ・ヒストリー——名もなき10年のクロニクル』（共訳、風行社、2013年7月）

現在は元カナダ自由党の党首だったマイケル・イグナティエフの政治的自叙伝（Michael Ignatieff, *Fire and Ashes: Success and Failure in Politics* (Random House Canada, Forthcoming) の翻訳の翻訳に取り組んでいる。

ところで2012年は様々な意味で英国が注目された年であった。私の滞在中に限っても5月の「ロンドン・マラソン」に始まり、エリザベス2世の即位60周年を記念する「ダイヤモンド・ジュビリー」を経て、7月23日に開幕した「ロンドン・オリンピック」まで、大きなイベントの連続だった。

私にとって2012年は、政治学研究者を目指すきっかけとなった故サー・バーナード・クリックの『政治を擁護して (*In Defence of Politics*)』（邦訳『政治の弁証』、前田康博訳、岩波書店、1969年）という本が出版されてから50周年目に当たる。それを記念して、かつてクリックが教鞭を執ったシェフィールド大学の政治学教授マシュー・フリンダース (Matthew Frinders) による *Defending Politics: Why Democracy Matters in the Twenty-first Century* (Oxford: Oxford University Press, 2012) が出版された。両者を比較すると、この50年間に政治を取り巻く状況がどのように変化したかがよく理解できる。

クリックがあえて『政治を擁護して』を出版したのは、「ホッブスの言葉でいえば——「まのあたりの無秩序ぶりに触発された」小論であり、政治の汚名をすすごうとする試みである」（邦訳、xiii）。その際クリックが擁護しようとした「政治」次のように定義されている。すなわち「一定領域内の諸利益が調停を必要とするほどに成長したとき、そこに統治を可能にするための活動にほかならない……（中略）……政治は、たんにこれら利益が調停されるばあいの秩序問題の解決方法である。——それは、暴力やよりも強制よりも調停をえらび、共同の生存と利益に最適な妥協水準を諸利益に発見せしめるために有効な方法としてえらぶ」（邦訳、21頁）。このような「政治」に対しての敵としてクリックは以下のものを挙げている。①イデオロギー、②デモクラシー、③ナショナリズム、④テクノロジー（工学主義）、さらに一見「政治」の味方のように見えるが、その実やはり「政治」の敵とみなされるのは、a-political liberalism（政治無視的自由主義）、non-political conservatism（政治超然的保守主義）、anti-political socialism（政治破壊的社会主義）の三つである。

これに対してフリンダースが新しい「敵」として明示的に挙げているのは「市場 (Market)」、 「危機」 (Crisis)、 「メディア」 (Media) の三つである。クリックが「イデオロギー」を最大の「敵」と見なした背景には「冷戦」がある。その後50年間に冷戦は終焉し、「グローバル化」、「リスク

特別研究休暇中の成果報告——出版50周年目にBernard Crick, *In Defence of Politics* (1962) を再読する  
社会]、「情報操作」が新しく「政治」の敵として出現した。クリックとフリンダースとを比較することによって、この50年間の政治社会における変化を浮き彫りにすることができるだろう。その際の分析視点として私は、1990年前後から顕著になった「再配分の政治」から「承認の政治」への転換を重視したい。研究成果は順次、『年報』や『法学研究』に発表する予定である。